

永 久 平 和

石原莞爾自筆

第147号
(平成31年1月25日)

目次

巻頭言……………	1
石原莞爾平和思想研究会の皆様へ 仲條拓躬	
◆石原莞爾は 「天皇共産党」か……………	2
◆宿願の石原莞爾将帥 野村乙二郎 墓参を終えて……………	4
◆会員便り……………	6
◆計報 SNS 石原莞爾語録……………	7

宣言 (昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

石原莞爾平和思想研究会の皆様へ

当会会長 仲條 拓躬



「平成」最後の年が始まりました。同志・会員の皆様におかれましては、様々な思いを胸に抱きつつ新しい年を迎えられた事と存じます。日頃の当会の運営に対しましてはご理解とご協力を賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、戦後70年以上が経ち戦争を体験している方も激減しており、ますます石原莞爾平和思想研究会の役割が重要なものとなってきております。

アジア諸民族の共通理解にとって大切なことは、欧米白人による搾取、精神的、文化的、経済的な独立ということではないでしょうか。歴史を振り返り、もし白人諸国家の勢力拡大・植民地支配がアジアに及ばなかったら、アジアはもっと別な形で平和的に共存していたことでしょうか。

17世紀初のイギリスのインド侵略、19世紀末の中国のアヘン戦争など、欧米諸国家によるアジアの植民地獲得競争は、否が応でも日本を独立維持のため軍事優先国家に変貌させました。もしも日本が抵抗して、戦わなかったら今頃アジアは白人の奴隷として自由を奪われていたことでしょうか。

歴史を学ぼうとしない日本人は、白人社会のマインドコントロールから脱して自らの想像力を働かせるべきです。世界史の本質とは、400年間に渡ってアジア、アフリカそして南北アメリカ、すなわち全世界が、白人帝国主義によって奴隷化されてきた歴史と言っても過言

ではありません。

中国・韓国の両国と日本も、長く同じ漢字文化圏として互いに争わず共存共栄してきたものを、不幸にして19世紀以来、白人諸国化の共同戦略によって互いに憎み合い、争うように仕向けられてしまいました。この状態は戦後70年以上を経てもなお続いていきます。

日米関係をみると、日米安保条約に名を借りた米軍の日本監視目的の駐留、グアム移転費の天文学的経済負担など、アメリカの年次報告書に従わされて法律は次々と改悪されました。

国民はこうした本質の真実を知る機会はありません。中国・韓国による歴史問題も、それに異を唱えることのできる生き証人である方々は、老齢化で次々に世を去りつつあります。いたずらに人種対立を煽るつもりはありませんが、願わくは、日中韓諸民族のうちの心ある人々が、同じアジア人としての共通意識に目覚め、こうした白人国家群の積年の世界戦略に対する共通認識を持つて欲しいと願います。このままでは白人国家にいい様に操作され、近隣諸国同士が果てしないがみ見合いを続けることになるのです。

我々はそれほど愚かであってはならないのです。その共通理解のためには、隠されてきた石原莞爾の掲げた満州国建国の動機と東亜連盟の理念に、日本と中国の数百万人が賛同した歴史の検証は最重要と考えます。

今の世の中、人間関係が希薄になってきていますが、どうぞ我々石原莞爾平和思想研究会の同志におかれましては希薄になることのないように絆を強固なものとしていただければ幸いに存じます。これからの石原莞爾平和思想研究会が実りあるものとなるよう、そして皆様のご健勝とご多幸を心より祈念申し上げます。

う、従来の懐疑からの再出発の気持ちは、さらに満州事変の最中における満州人の有力者である人々の、日本軍に対する積極的な協力と軍閥打倒の激しい気持ち、そしてその気持ちから出た献身的な努力、さらに政治的な才幹の發揮を眼のあたりに見て、一層、違ってきたのである。在満三千万民衆の共同の敵である軍閥、官僚を打倒することは日本に与えられた使命であった。この使命を正当に理解し、このために日本軍と真に協力する在満漢民族とその他を見、さらにその政治能力を見るにおいて、私どもは満蒙占領論から、独立建国論に転じたのである。なぜならば、支那問題、満蒙問題は単に対支問題ではなく、実に軍閥、官僚を操り、アジアを塗炭の苦に呻吟せしめているものは、欧米の覇道主義であり、対支問題は、対米英問題である以上、この敵を撃砕する覚悟がなくては、この問題を解決することは木に縁りて魚を求むるの類であると思つていたがために他ならない。

かくて、私どもは、満蒙に新生命を与え、満州人の衷心からの要望である新国家の建設によつてまず満州の地に日本人、中国人の提携の見本、民族協和による本道の王道楽土の建設の可能性を信じ、従来の占領論を放棄して、新国家の独立を主張するまでの転向となつたのであつた。形式の上でいえば、占領論の放棄は消極論への転化のようであるが、

実際には、却つて反対に大きな前進であり、積極的な面への飛躍的な躍進であつたのである。ここに私どもの満州建国に対する異常な関心、情熱が、今もつて激しく躍動している所以が存する。民族協和への確信、漢民族に対する信頼、これが満州建国への大きな基盤となつていのである。相手の民族に政治能力がないのであるならばいざ知らず、これが能力を認め、かつ信頼を置く以上、占領してこれを統治する必要はない。新国家において徹底的に、漢民族はじめ、他民族の才能を發揮せしめ、日本人も新国家の建設に裸一貫となつて参加して、この建設の過程に、本道に日本を信頼せしめ、日本人に限りない愛着を持たしめてこそ、唯一最良の道であると思つたのである。日支提携の中核として、また紐帯としての満州の王道楽土を考えた私どもの道は、いま東亜の問題として東亜連盟結成への過程に進み、まさにその前夜にある。

今の長期戦争のその次ぎには、素晴らしい短期戦争が出てきます。極めて短時間に戦争の運命が決定せられる時が来るのです。それは何かというとき空軍の勝負であります。われわれ陸海軍人が失業状態になるわけです。陸海軍のようになまごまごしたもので世界は一つになりません。世界は空軍で一挙に勝負のつく時代が必ず来ます。それが極めて近い期間に来ると私は思つていのであります。

人間の歴史があつて以来、今が一番大きな時であります。今に世界は一つになる。でありますから私どもは今、準決勝の状態だといつてよいのであります。われわれ東亜の組とどこかもう一つの集団、即ち、ソビエト集団とアメリカ集団の三つの中でどれかが、われわれ東亜の集団と準決勝に残るのであります。そうして三十年ぐらいい過ぎると、この準決勝に残った奴が、もう人類の歴史で未だかつて見ざるところの残酷極まるどころの大戦争を最短期間にバタバタやつてしまふ。それで世界の人口が恐らく半分以上になつてしまふでしょう。これでは、とても戦争はできないということが、心からわかりました。世界は一つになるのです。

★発行所 石原莞爾平和思想研究会

〒270-1158 千葉県我孫子市船戸1-3-15-113

石原莞爾平和思想研究会事務所内

FAX 04-7183-5591

郵便振替 00130-9-410942

発行人 仲條拓躬

編集人 「永久平和」編集委員会

定価 200円(送料別)

会費(年間) 篤志会員 10000円以上

一般会員5000円、誌友会員4000円

第147号 平成31年(2019年)1月25日発行

<http://www.ishiwara-kanji.com/>

E-mail : heiwa_ishiwara_kanji@yahoo.co.jp